とびやまじょうせき
飛山城跡第Ⅵ次確認調査概報

― 平成７年度 ―

平成９年３月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市は、本年度（平成８年）迎えました市制百周年を契機として、先人たちの英知と努力により今日まで守り伝えてきた歴史的・文化的遺産を検証し、より良い状態で次の世代に継承するための事業を積極的に推進しているところでございます。

特に、昭和52年度に国の史跡指定を受けました飛山城跡の史跡整備に向けた発掘調査を平成４年度から実施しており、本年度、第Ⅵ次調査として事業を進めておりましたところ、大型竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの状況や、それらを囲む大規模な堀の変遷を確認することができ、史跡整備に向けての資料が徐々に整いつつあります。

そのような中、古代の烽施設として初めての発見となりました「烽家」と書かれました墨書土器が発掘調査により出土し、全国的な話題となりました。

そして、新聞やテレビ等により報道されますと、多くの研究者が訪れ、また、市民の関心も高まってまいりました。

そこで、教育委員会では、実行委員会を組織し、学識経験者の支援のもとに、９月15日には市制百周年記念事業の一つとして「古代国家とのろし」のシンポジュウムを開催し、また、のろしを上げる実験を行うなど大きな成果を得ることができました。

烽跡の推定地は全国で幾つかありますが、本市のように発掘調査により遺物が出土した例はなく、本市の歴史ばかりではなく、日本の歴史を考える上での大きな発見となりました。

本書は、平成８年度の市制百周年事業の一つとして大きな足跡を残しました、飛山城跡の「烽」関係を中心とした調査概要をまとめたものでございます。ここでの資料が多くの方々にご活用いただき、栃木県の古代史及び中世史を考える上で一助となれば幸いでございます。

最後に、発掘調査にあたりご指導をくださいました保存整備委員会の先生方をはじめ、文化庁記念物課、栃木県教育委員会に対し心から感謝を申しあげます。

平成９年３月

宇都宮市教育委員会
教育長　大　塚　一　之

例　　言

1．本書は、平成７年度に行った飛山城跡発掘調査の調査概要報告書である。尚、本城跡は宇都宮市竹下町392-1 他に所在し、史跡整備に伴う発掘調査である。

2．本調査は、国・県の補助金を導入し、宇都宮市教育委員会が主体となり調査を行った。調査期間は、平成７年９月４日～８年３月18日まで発掘調査を実施した。

3．調査対象面積は、約48,000㎡で、調査面積は、約4,500㎡である。

4．遺跡地における測量、写真撮影等は阿久津正代子，入江タカ子，入江文子，入江通子，入江つや子，藤戸佳代，清水豊，斉藤しのぶ，手塚佳介の協力を得て、梁木誠，大塚雅之，富川努，神野安伸，今平利幸がこれにあたった。

5．遺構，遺物の整理，実測等は、福田貴久栄，鈴木道子，鈴木芳子，樋口静子，大森八重子，大野節子，賀来孝代，横堀聡，清水豊，大澤順子，君島朱美，岡田有紀子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。尚、陶磁器に関しては、国立歴史民俗博物館の吉岡康暢教授に鑑定して頂いた。

6．本書の執筆は、今平が担当した。

7．本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。

8．発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕文化庁記念物課　田中哲雄

飛山城跡保存整備委員会委員	峰岸純夫	飛山城跡保存整備委員会委員	高瀬要一
同	阿部　昭	同	塙　静夫
同	市村高男	同	橋本澄朗
同	大金宣亮	同	藤本正行
同	定岡明義	同	濱島正士

〔事務局〕

〈第Ⅵ次調査時〉

教育長	大塚一之	文化財保護係長	手塚英男	国民文化祭推進班長	湯沢孝夫
教育次長	青柳弘之	文化財保護係	梁木　誠	国民文化祭推進班	関口　淳
文化課長	横堀杉生	同	小松俊雄		
文化振興係長	桜井敬朔	同	大塚雅之		
文化振興係	臼井成志	同	富川　努		
同	高栖良子	同	神野安伸		
同	小野敬子	同	今平利幸		

〔調査補助員〕

阿久津タツ，阿久津キヨ，阿久津正代子，荒井シゲ，荒井操，荒井セン，入江タカ子，入江つや子，入江文子，入江通子，大橋みどり，小川ミノ，小川覚治，坂寄修二，坂寄忠，坂寄ミヨノ，坂木政次，島田カウ，関谷勇，高橋清二，野口栄子，樋山ナミ子，山中金三郎，矢島久夫，藤戸佳代，斉藤しのぶ，手塚佳介，清水豊，菱沼喜裕

9．発掘調査及び報告書作成に関しては、次の諸機関，諸氏の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

栃木県教育委員会文化課，栃木県埋蔵文化財センター，秋元陽光，秋山隆雄，足立佳代，石部正志，市橋一郎，泉森皎，井上信正，内山敏行，大沢伸啓，小森哲也，斉藤和行，金坂清則，亀谷弘明，木下良，木本雅康，小池伸彦，佐原真，佐藤信，坂井秀弥，酒寄雅志，坂爪久純，鈴木靖民，鈴木泰浩，千田嘉博，田熊清彦，田代隆，傳田伊史，津野仁，中島寛，初山孝行，平川南，安河内敬志，八巻孝夫，籾山明，宮田毅，吉岡康暢，山口耕一，山村信榮

凡　　例

1．挿図の縮尺は、竪穴住居跡・竪穴建物跡が1/60、堀が1/80、カマドが1/30を基本とし、遺物は1/3で示した。また、遺物実測図番号は遺構平・断面図の番号及び図版の遺物番号と一致する。

2．断面図基準線は標高であり、平面図の方位は真北を示す。

3．遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。

ロームブロック…ロームB　今市パミス…IP　七本桜パミス…SP　鹿沼パミス…KP　粘土…Ne

4．遺構においては次の略号を使用した。

竪穴住居跡…SI　竪穴建物跡…ST　掘立柱建物跡…SB　溝…SD　不明…SX

5．土層断面図において、□は黒色地山、▤はローム層、▨は鹿沼軽石層を示す。

6．土器実測図の□は煤の範囲を示す。

目　　次

序・例　言・凡　例

Ⅰ　はじめに
　1　調査の経過と方法……1
　2　遺跡の環境……2
Ⅱ　調査概要……4
　1　古代
　　①　竪穴住居跡……7
　2　中世
　　①　竪穴建物跡……14
　　②　掘立柱建物跡……21
　　③　堀……21
　　④　溝……27
Ⅲ　おわりに
　1　中世について……28
　2　古代について……29

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図……3
第2図　調査対象範囲図……4
第3図　トレンチ配置図……5・6
第4図　ＳＩ04遺構平・断面図……7
第5図　ＳＩ04出土遺物実測図……8
第6図　ＳＩ18遺構平・断面図……9
第7図　ＳＩ18カマド平・断面図……10
第8図　ＳＩ18出土遺物実測図(1)……11
第9図　ＳＩ18出土遺物実測図(2)……12
第10図　ＳＩ19遺構平・断面図……13
第11図　ＳＩ19出土遺物実測図……14
第12図　ＳＴ21遺構平・断面図……15
第13図　ＳＴ21出土遺物実測図(1)……16
第14図　ＳＴ21出土遺物実測図(2)……17
第15図　ＳＴ22遺構平・断面図……18
第16図　ＳＴ22出土遺物実測図(1)……19
第17図　ＳＴ22出土遺物実測図(2)……20
第18図　ＳＴ22出土遺物実測図(3)……20
第19図　ＳＢ20遺構平・断面図……22
第20図　Ｇ－16遺構平・断面図……23
第21図　Ｇ－17遺構平面図……24
第22図　Ｇ－17遺構断面図……25
第23図　Ｇ－18遺構平・断面図……26
第24図　5号堀変遷図……29

表　目　次

第1表　ＳＩ04遺物観察表(1)……7
第2表　ＳＩ04遺物観察表(2)……8
第3表　ＳＩ18遺物観察表(1)……10
第4表　ＳＩ18遺物観察表(2)……11
第5表　ＳＩ19遺物観察表(1)……11
第6表　ＳＩ19遺物観察表(2)……14
第7表　第Ⅵ次竪穴建物跡一覧表……15
第8表　第Ⅵ次掘立柱建物跡一覧表……22

写真図版目次

PL1　①　飛山城跡全景（上から）
　　②　飛山城跡遠景（北から）
PL2　③　ＳＩ18完掘状況
　　④　ＳＩ04遺物出土状況
　　⑤　「烽家」の墨書土器
　　⑥　Ｔ－78遺構確認状況
　　⑦　ＳＸ10作業風景
PL3　⑧　ＳＴ21（北から）
　　⑨　ＳＴ21（北東から）
　　⑩　ＳＴ22（北東から）
　　⑪　ＳＢ20（東から）
　　⑫　ＳＴ23（南西から）
　　⑬　ＳＴ23床下土坑
　　⑭　Ｇ－17（南から）
PL4　⑮　Ｇ－16（南から）
　　⑯　Ｇ－18（西から）

Ⅰ　はじめに

1　調査の経過と方法

平成４年度から開始した史跡飛山城跡の整備に伴う発掘調査は、平成７年度に第Ⅵ次調査を行った。調査期間は、平成７年９月４日～平成８年３月18日までの約半年間を要した。

本年度は、先年度までが城跡中央に掘られた堀（４号堀）の北側部分の調査であったことから、その南側のⅥの曲輪と呼ばれている部分及び、内堀（以下５号堀と称す）の調査を行った。

Ⅵの曲輪に関しては、現状で明瞭な堀・溝が確認できず、ほぼ平坦な場所が約５haほど存在することからその機能が問題となっていた。また、５号堀に関しては、その規模の確認とそれを渡る施設としての土橋の確認が調査の主な目的となった。

調査の方法は、基本的に先年度同様トレンチ調査により遺構の有無を確認し、その際に特徴的な遺構であった場合には面的に広げて発掘を行った。尚、発掘調査の経過は次のとおりである。

（発掘調査日誌抄）

９月４日～14日	下草刈り，地形測量。
９月18日～10月13日	トレンチ設定後、重機により、各トレンチの表土剥ぎを行う。
10月16日・17日	ST16, SI18, SI19の掘り下げ。
10月18日	ST16, SI19のセクション図作成。
10月20日～11月６日	ST16, SI18, SI19遺物出土状態図作成後、遺物の取り上げ。
11月７日・８日	SI18, SI19の柱穴の掘り下げ。
11月９日・10日	ST20, SI02の掘り下げ。
11月13日	G-15清掃後、全景写真撮影。
11月14日～16日	T-69～T-74ジョレンがけにより遺構の確認、その後遺構平面図を作成。
11月17日～28日	ST21,ST22の掘り下げ。
11月29日～12月７日	ST21, ST22のセクション図・遺構平面図・遺物出土状態図作成。
12月11日～15日	T-78～T-88ジョレンがけにより遺構の確認、その後遺構平面図を作成。
12月18日～26日	T-90～T-102を重機により、表土剥ぎを行う。
１月８日～16日	ST23の掘り下げ、遺物平面図作成後遺物写真撮影。
１月22日～25日	G-16, G-18の掘り下げ後、セクション図作成。
１月26日～31日	T-97～T-102遺構確認後、平面図作成。
２月１日～６日	SX-10石実測。
２月７日	航空撮影のための清掃を行う。
２月８日～21日	ST25掘り下げ後遺物・遺構平面図作成。
２月22日～26日	G-17遺構平面図・コンター図作成。
２月28日～26日	重機により埋め戻しを行う。また、図面等の補足調査を行う。
３月18日	調査終了。道具の運び出しを行う。

2　遺跡の環境

飛山城跡は、宇都宮市の中心から東方へ約７kmに所在する。本城跡は、南北に貫流する鬼怒川左岸の段丘上に立地する。城跡の標高は130～133ｍで、鬼怒川の河床からの比高は約20ｍを測る。城跡の北側と西側は鬼怒川の浸食作用により断崖をなし、まさに自然の要害である。これに対し、南側と東側は人工の二重の堀により守られる。これらにより守られた城域は、約14haと広大である。現在、このほとんどが雑木林となっている。

今回の調査で古代の竪穴住居跡が確認でき、まずはその時期の周辺遺跡について概観してみる。上野遺跡(7)・釜根遺跡(8)・日枝神社南遺跡(9)では、幅８～15ｍの２～３本の平行する溝が確認された。これらは埋土中から古代の土器が出土し、また、各遺跡間とも同様の断面形状であることから、第１図のように直線的に繋がると考えられ、古代の東山道と推定されている。本跡との距離は一番近い地点で西方約2.5kmである。また、本跡から北方約６km付近で鬼怒川を渡河したものと考えられる。この間に衣川駅家が設けられたと想定され、これより陸奥側には新田駅家、都側には田部駅家が存在した。

この時期の官衙関連施設との位置関係は、南南東約10kmに芳賀郡の役所跡と考えられている堂法田遺跡があり、南南西約16kmに河内郡の役所跡と考えられている多功遺跡がある。また、下野国府跡までは約25kmである。集落跡は本跡の半径１km以内には見られず、1.5～２km離れた場所に奈良・平安時代の集落跡が確認できる。

次に、中世における周辺の状況について見てみる。

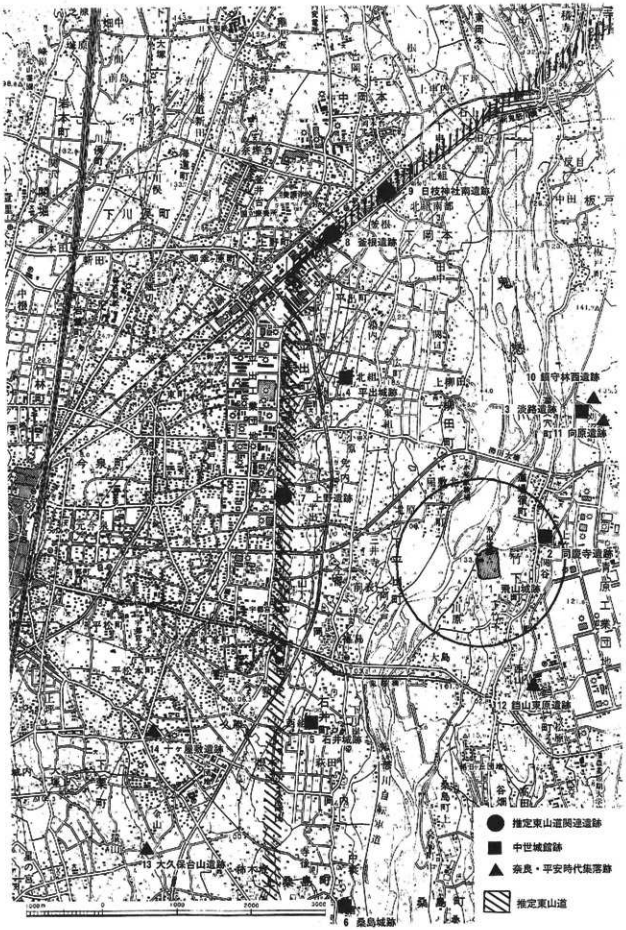
本城跡は芳賀氏の城である。鬼怒川を境に東岸はかつては芳賀郡に属していた。芳賀氏は宇都宮氏より養子を何度かむかえ入れていることから、広い意味での同族とも言えるが、中世を通じて基本的には宇都宮氏の重臣という立場である。しかし、世が世であるから、時には敵対関係になるときもあり、その意味では、この鬼怒川が、両氏の境界線ともいえる。その鬼怒川に迫り出すように立地するのが飛山城跡である。

まず鬼怒川東岸の城の配置をみてみる。芳賀氏の本拠である真岡城は南南東約13kmに所在した。北方約12kmのところには、本跡と同様の立地にある氏家町勝山城跡が存在する。この地域は、元々は氏家氏の勢力下であったが、14世紀段階以降は芳賀氏の勢力圏に入ったものと考えられている。

本跡から東方約600ｍのところには、芳賀氏の菩提寺である同慶寺が所在する。この寺には現在でも芳賀氏累代の墓碑が存在し、宇都宮市の指定を受けている。かつてはこの寺を囲むように二重の空堀が存在したとのことであり、飛山城の支城としての役割を果たしていたものと考えられている。

次に、鬼怒川西岸の宇都宮市街側を見てみる。北から平出城跡(4)、石井城跡(5)、桑島城跡(6)、刑部城跡が西岸にほぼ一直線に並ぶ。これらは沖積地あるいは低台地上に立地し、城と言うよりは居館としての様相が強い。そして、西方約６kmのところに宇都宮氏の本拠地であった宇都宮城跡が所在する。現在、近世宇都宮城の西館堀直上に宇都宮市役所が建っているが、飛山城跡の西崖より市役所がよく見通せ、当時もこの場所から宇都宮方の情勢が十分把握できたものと思われる。

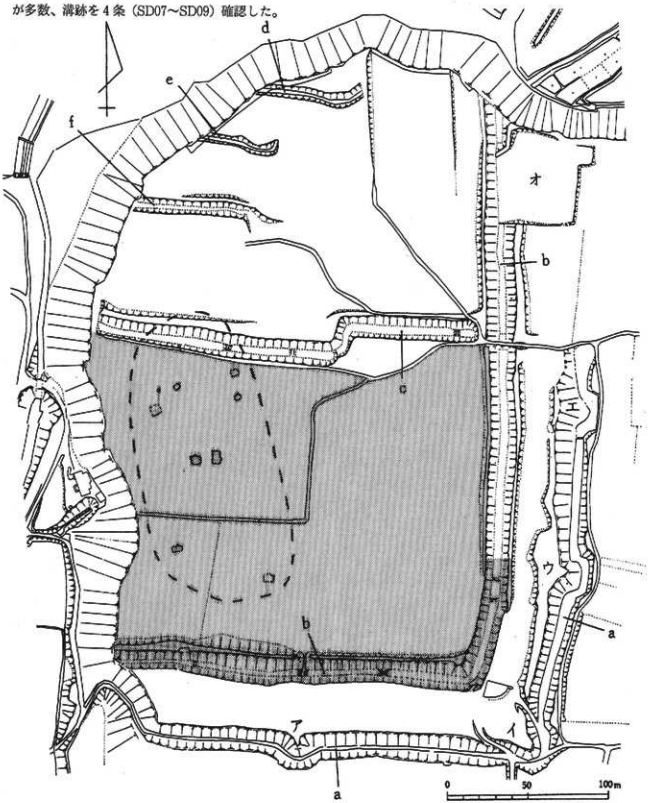
また、戦国期の山城である多気城跡は西北西約15kmに位置し、狼煙を挙げるならば十分に確認できる。



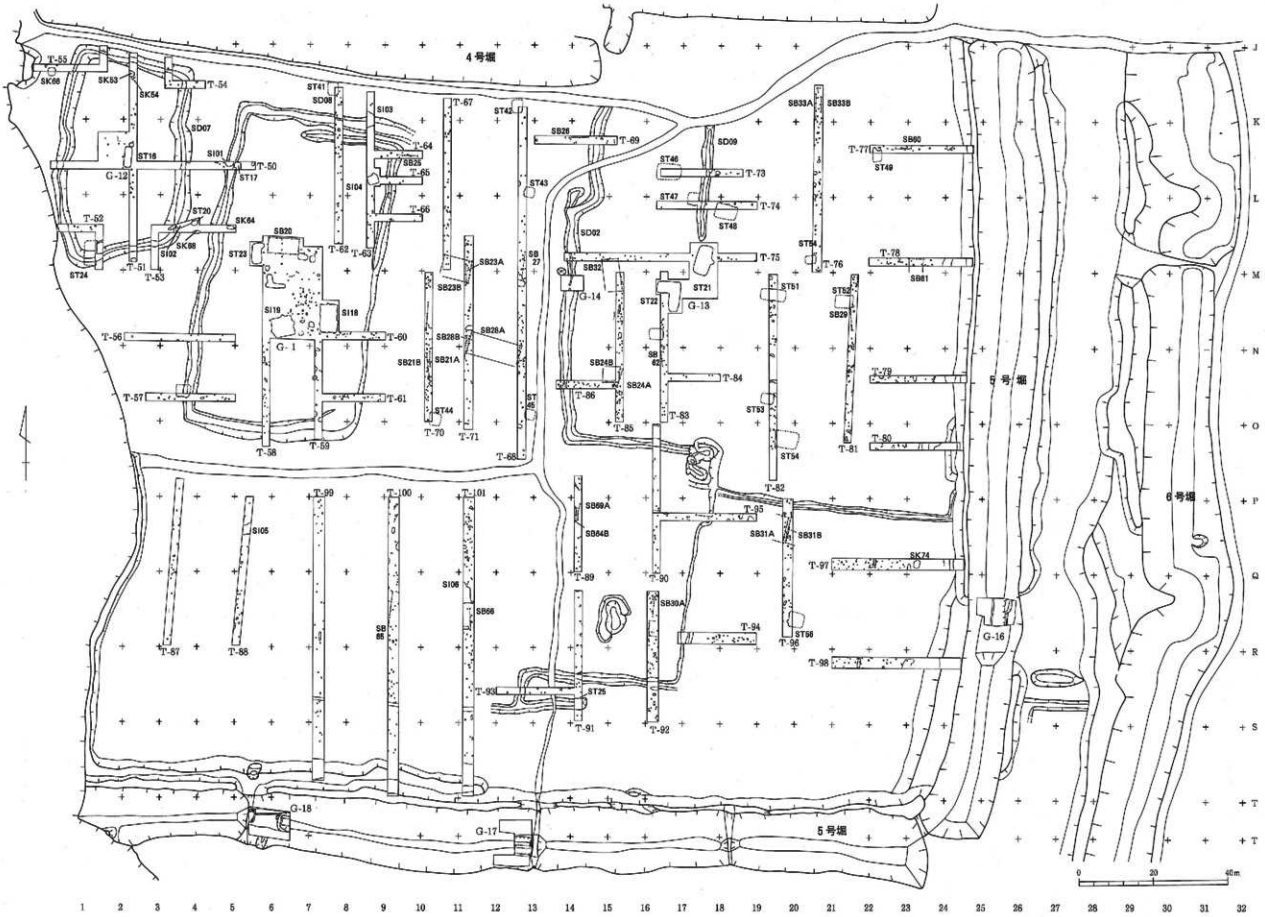
第１図　周辺遺跡分布図（1:50,000）

Ⅱ　調査概要

調査区内に設置したトレンチは51本（T-50 ～T-101)、面的に広げた部分Gは7ヵ所（G-12～G-18）設定し、調査を行った。その結果、古代の竪穴住居跡が8軒（SI01～SI16, SI18, SI19)、中世の竪穴建物跡が23基（ST16, ST17, ST21～ST25, ST41～ST56)、掘立柱建物跡が28棟（SB20～SB33, SB60～SB66)、土坑が多数、溝跡を4条（SD07～SD09）確認した。



第2図　調査対象範囲図


4号堀
5号堀
6号堀
5号堀
T-55
SK68
SK63
SK54
T-54
ST41
SD08
SI03
T-67
ST42
SB26
T-89
SB33A
SB33B
SD07
ST16
SI01
T-50
ST17
G-12
T-64
SB25
T-65
T-66
ST43
SD09
ST46
T-73
T-77
SB60
ST49
ST47
T-74
ST48
T-52
ST20
SK64
SK98
SI02
SB20
ST23
T-62
T-63
SD02
SB32
T-75
ST54
T-76
T-78
SB61
ST24
T-51
T-53
SB23A
SB23B
SB27
G-14
ST21
G-13
ST22
ST51
ST52
SB29
SI19
SI18
T-56
G-1
T-60
SB28B
SB28A
SB21B
SB21A
SB24B
SB24A
SB62
T-84
T-79
T-57
T-61
ST44
T-86
T-85
T-83
ST53
T-80
T-70
T-71
T-68
T-58
T-59
T-81
T-82
T-99
T-100
T-101
SB69A
SB64B
T-93
SB31A
SB31B
SI05
T-97
SK74
T-89
T-90
SI06
SB66
SB30A
T-94
ST56
T-96
G-16
T-87
T-88
SB65
T-98
T-92
T-91
ST25
G-18
G-17
0
20
40m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
T

第3図　トレンチ配置図

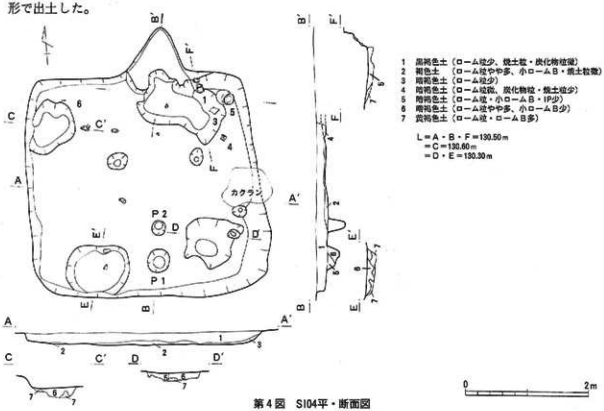
1　古代

①　竪穴住居跡

今回の調査の結果、第３図からわかるようにG-15を中心として南北約150ｍ×東西約60ｍの範囲内に８軒の竪穴住居跡を確認した。これらは、見晴らしのよい西崖寄りに立地する。８軒のうちSI04，SI18，SI19の３軒を完掘し、残りのSI01，SI02は一部調査、SI03，SI05，SI06はプランのみ確認した。以下、各々の住居跡について記す。

SI04（第４・５図）

位置　８軒の住居跡中、北東寄りに位置する。 **平面形**　南北3.7ｍ×東西3.5ｍのほぼ正方形　**主軸方向**　N-12°-W　**床面**　四隅に床下掘り込みがあり、いずれもロームＢ等による貼床が施されている。 **壁**　確認面から深さ20cm　**壁溝**　なし。 **柱穴**　P1・P2の２本　その他の穴はやや浅目である。 **カマド**　北壁やや東より。粘土を主体として構築。 **遺物**　土師器甕２、坏１、須恵器鉢１。１と４は北東コーナー部床直から完形で出土した。



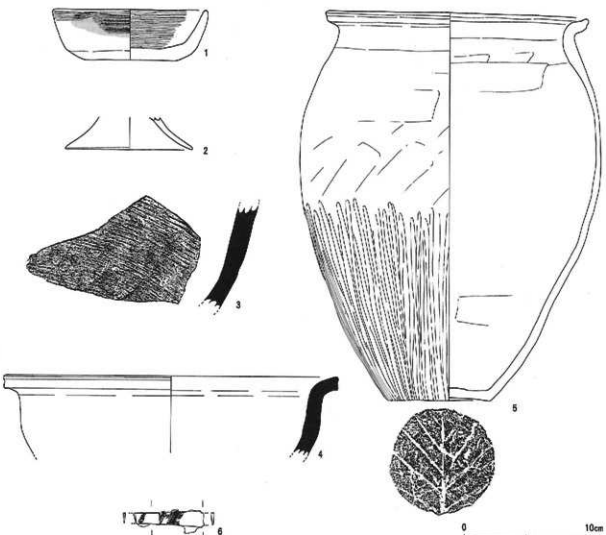
第４図　SI04平・断面図

No.	器種	寸法（cm）	器形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	土師器 坏	口 12.5 高 4.1 底 7.1	・平底で、体部が直線的に立ち上がる。 ・ロクロ成形、内面及び口縁部外面ヘラミガキ、回転ヘラ切り後ヘラケズリ。	内面黒色 外面淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良	カマド脇	口縁部一部欠損 内面黒色処理 外面煤付着
2	土師器 台付甕	口 —— 高 —— 底 (10.2)	・台部が「ハ」字状に開く。 ・内外面ヨコナデ。	暗赤褐色	微砂粒	良	覆土	破片
3	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	・外面平行タタキ。	灰色	白色砂粒	良	覆土	破片

第１表　SI04遺物観察表(1)

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
4	須恵器 鉢	口 (26.8) 高 —— 底 ——	・内湾する体部から口縁部は大きく外反する。口縁端部は面取り。	灰色	白色砂粒	良	覆土	1／8残
5	土師器 甕	口 21.3 高 31.2 底 8.3	・長胴で、胴部最大径を上半にもつ。口縁部が指み出され、外面に凹線がめぐる。 ・胴部上半ナデ、下半ヘラミガキ。底部に木葉痕が残る。	暗褐色	白色砂粒 雲母，赤色スコリア粒	良	床直	完形
6	鉄製 刀子	最大幅 1.3	・両関。一部繊維状のものが付着。				覆土	切先と茎部分が欠損

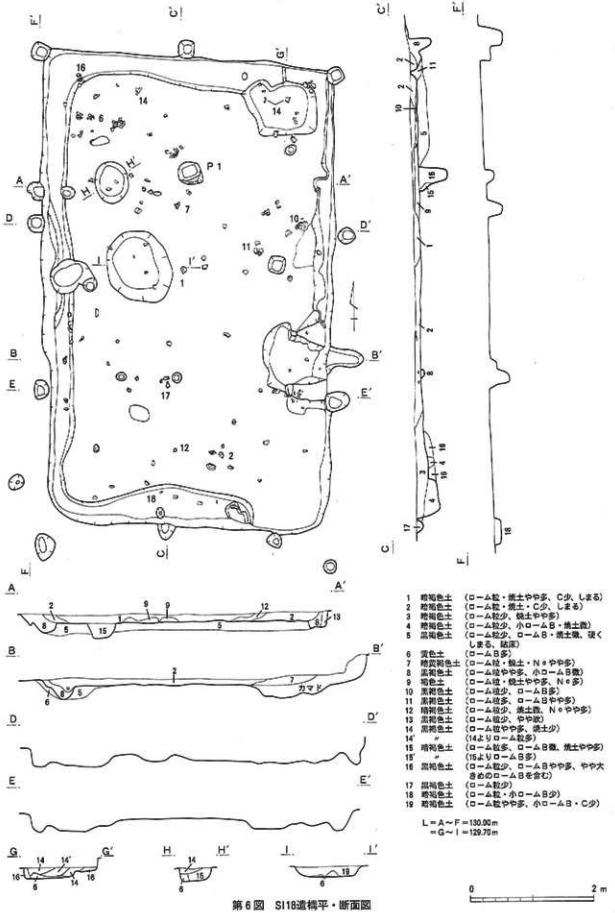
第2表　SI04遺物観察表(2)



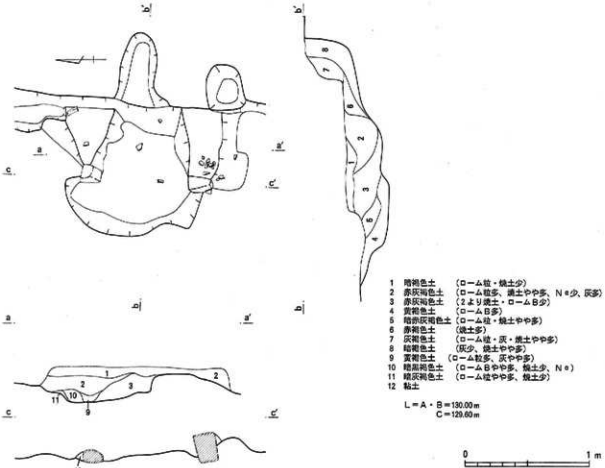
第5図　SI04出土遺物実測図

SI18（第6～9図）

位置　8軒の住居跡中ほぼ中央に位置する。 **平面形**　南北7.5m×東西4.6mの長方形 **主軸方向**　N-95°-E **床面**　南側2/3は非常に硬くしまったローム地山で、残り北側1/3は貼床（5層）である。 **壁**　確認面から深さ10cmと非常に浅く、ローム地山を若干掘り込んだ程度である。 **壁溝**　南東部隅と北東部隅の一部を除いて廻る。 **柱穴**　10本、うち、住居跡内にはP1の1本があるのみで、他は壁際に等間隔に位置する。長軸方向の柱間は9尺で、短軸方向の柱間は8尺である。尚、南側の柱穴は棟持部分が確認できず、両脇の2本は南壁から離れた場所に位置する。 **カマド**　東壁やや南より。両側の袖石として砂質凝灰岩を使用。 **遺物**　土師器甕11、坏4、須恵器坏12、高台付坏1、甕1、蓋2、盤2。なお、住居跡中央床面から「烽家」墨書土器が出土した。



第6図 SI18遺構平・断面図



第7図　SI18カマド平・断面図

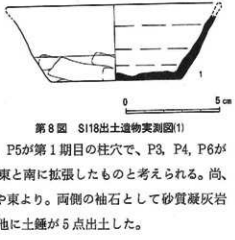
No.	器種		寸法 (cm)	器形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	須恵器	坏	口 (11.4) 高 (4.0) 底 7.0	・平底で、ほぼ直線的に口縁部に至る。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部は2方向のヘラケズリ。	暗灰色	砂粒、雲母	良	床直	口縁部一部欠損 内面に「降家」墨書
2	土師器	坏	口 (14.0) 高 4.1 底 (7.6)	・平底で、体部が直線的に立ち上がる。 ・ロクロ成形、内面及び口縁部外面ヘラミガキ、ヘラケズリ後ナデ。	内面黒色 外面淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良	床直	1／3残存 内面黒色処理
3	須恵器	坏	口 (13.6) 高 4.3 底 (7.2)	・平底で、直線的に外開する。 ・ロクロ成形、回転ヘラ切り。	青灰色	白色砂粒	良	覆土	1／3残存 底部外面にヘラ描き
4	須恵器	坏	口 13.4 高 3.8 底 7.5	・平底で、口縁部で外反する。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ヘラケズリ。	灰色	白色砂粒，雲母	良	覆土	1／3残存 火襷が見られる
5	須恵器	坏	口 (14.2) 高 4.4 底 7.4	・平底で、口縁部で外反する。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部は2方向のヘラケズリ。	灰白色	白色砂粒	良	覆土	2／3残存
6	須恵器	坏	口 (14.0) 高 4.1 底 (8.0)	・平底で、口縁部で若干外反する。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部は2方向のヘラケズリ。	灰褐色	白色砂粒，雲母	良	覆土	1／4残存 内外面に煤付着
7	須恵器	坏	口 (14.7) 高 4.4 底 (7.8)	・平底で、口縁部で若干外反する。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部は2方向のヘラケズリ。	灰褐色	白色砂粒，雲母	良	覆土	1／5残存 外面に火襷が見られる
8	須恵器	坏	口 (13.0) 高 4.2 底 (7.0)	・平底で、やや内湾気味に立ち上がる。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部は2方向のヘラケズリ。	灰色	白色砂粒，雲母	良	覆土	1／4残存
9	須恵器	坏	口 (13.8) 高 4.5 底 7.2	・平底で、やや内湾気味に立ち上がる。 ・ロクロ成形、回転ヘラ切り。	暗灰褐色	白色砂粒，小石	良	覆土	1／2残存
10	須恵器	蓋	口 14.7 高 3.5	・天井部回転ヘラケズリ後、擬宝珠状つまみを貼り付ける。	灰色	白色砂粒，小石	良	覆土	完形
11	須恵器	蓋	口 (17.6) 高 ——	・天井部回転ヘラケズリ。	青灰色	白色砂粒，小石	良	カマド	1／3残存 内面に線刻

第3表　SI18遺物観察表(1)

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
12	須恵器 甕	口 ―― 高 ―― 底 ――	・底部外面回転ヘラケズリ。	青灰色	白色砂粒，小石	良	覆土	内面は滑らかで転用硯の可能性有
13	土師器 甕	口 (9.2) 高 ―― 底 ――	・口縁部が直立する。 ・胴部状上半横位のヘラケズリ、下半縦位のヘラケズリ。	暗赤褐色	砂粒	良	覆土	1／6残存 内外面に煤付着
14	土師器 甕	口 (12.6) 高 ―― 底 ――	・口縁部は「く」字状を呈する。 ・胴部状上半横位のヘラケズリ。	淡赤褐色	数砂粒，赤色スコリア粒	良	覆土	1／12残存
15	土師器 甕	口 (13.4) 高 ―― 底 ――	・球胴で、口縁部は「く」字状を呈する。 ・胴部状上半横位のヘラケズリ、下半縦位のヘラケズリ。	赤褐色	砂粒	良	覆土	1／3残存
16	土師器 甕	口 (18.6) 高 ―― 底 ――	・口縁部はつまみ上げ直立する。 ・肩部横位ナデ、以下縦位ナデ。	暗褐色	砂粒，雲母	良	覆土	1／12残存 外面煤付着
17	土師器 甕	口 (13.2) 高 ―― 底 ――	・口縁部が摘み出され、外面に凹線がめぐる。 ・口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ。	暗赤褐色	砂粒，長石，雲母	良	覆土	1／3残存
18	唐臼車	径 (4.1)		灰色			覆土	石製

第4表　SI18遺物観察表(2)

須恵器坏で、寸法は推定口径11.4cm、推定器高4cm、底径7cmを測る。平底で、ほぼ直線的に口縁部に至る。ロクロ成形後、体部下端及び底部をヘラケズリする。胎土に雲母をやや多く含む。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。墨書は、土器の底部内面に「烽家」と書かれている。文字は、長さ約37mm，幅約17mmの中に、やや縦長の行書体風に墨書されている。



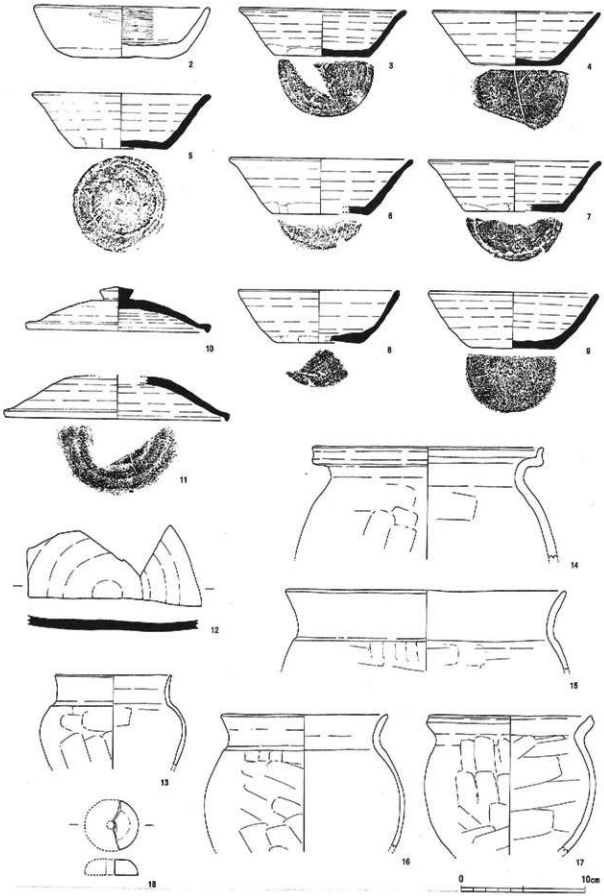
第8図　SI18出土遺物実測図(1)

SI19（第10・11図）

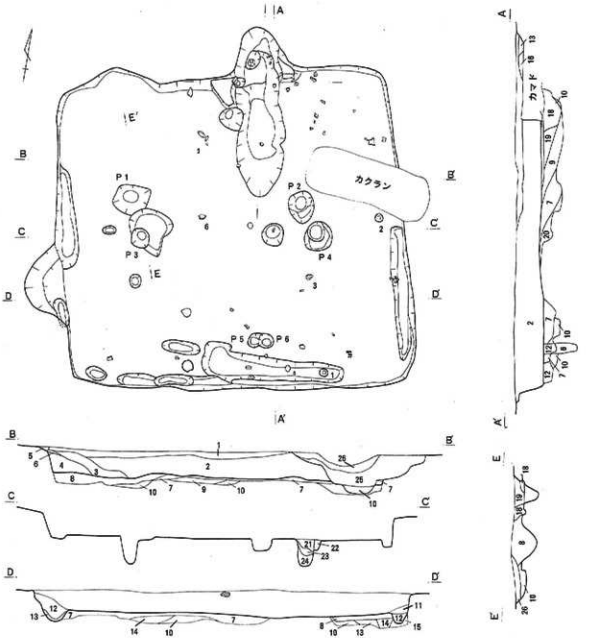
位置　SI18の西隣に位置する。**平面形**　南北5.0m×東西5.6mのほぼ正方形　**主軸方向**　N-16°-W　**床面**　中央部の一部を除いて貼床である。**壁**　確認面から深さ40cm　**壁溝**　東壁・南壁・西壁の一部にみられる。**柱穴**　6本、拡張の可能性があり、P1, P2, P5が第1期目の柱穴で、P3, P4, P6が第2期目の柱穴である。1期と2期の柱配置からすると、全体的に東と南に拡張したものと考えられる。尚、P5, P6は出入口に関係するピットと考えられる。**カマド**　北壁やや東より。両側の袖石として砂質凝灰岩を使用。**遺物**　土師器甕4、須恵器坏6、高台付坏4、蓋2。この他に土錘が5点出土した。

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	須恵器 坏	口 9.9 高 3.3 底 6.1	・平底で、ほぼ直線的に口縁部に至る。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部は2方向のヘラケズリ。	青灰色	砂粒，小石	良	覆土	完形 内外面に煤が付着、灯明皿か
2	須恵器 坏	口 13.0 高 3.9 底 7.0	・平底で、口縁部で外反する。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ヘラケズリ。	灰色	白色砂粒	良	覆土	完形
3	須恵器 坏	口 (12.4) 高 4.4 底 (7.0)	・平底で、口縁部で若干外反する。 ・ロクロ成形後体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ヘラケズリ。	灰褐色	白色砂粒，雲母	良	覆土	1／4残存
4	須恵器 高台坏	口 ―― 高 ―― 底 (7.0)	・高台を付す。	灰褐色	白色砂粒，雲母	良	覆土	1／3残存
5	須恵器 蓋	口 17.5 高 3.9	・天井部回転ヘラケズリ後、擬宝珠状つまみを貼り付ける。	灰褐色	白色砂粒 小石	良	覆土	ほぼ完形
6	土師器 台付甕	口 ―― 高 ―― 底 11.6	・「ハ」字状に開く。 ・内外面ヨコナデ。	淡赤褐色	数砂粒	良	覆土	破片

第5表　SI19遺物観察表(1)



第9図　SI18出土遺物実測図(2)



1　暗褐色土　（ローム粒微・炭化物粒・焼土粒微）
2　褐色土　（ローム粒少・炭化物粒・焼土粒少）
3　黒褐色土　（ローム粒微）
4　暗褐色土　（ローム粒少、炭化物粒・焼土粒少）
5　褐色土　（ローム粒少、柔らかい）
6　炭褐色土　（ローム粒多）
7　暗茶褐色土（ローム粒多、炭化物粒、焼土粒（貼床））
8　暗褐色土　（ローム粒やや多、少ローム少）
9　黒褐色土　（ローム粒微）
10　炭褐色土　（ローム粒多、ロームB多）
11　暗褐色土　（ローム粒微、炭化物粒、焼土粒）
12　黒褐色土　（ローム粒少、小ロームB微、炭化物粒やや多）
13　暗茶褐色土（ローム粒多、炭化物粒・焼土粒）
14　黒褐色土　（ローム粒やや多、小ロームBやや多、炭化物粒）
15　茶褐色土　（ローム粒やや多）
16　褐色土　（ローム粒やや多、炭化物粒・焼土粒少）
17　灰褐色土　（粘土多、焼土少）
18　暗黄褐色土（ローム粒多、小ロームBやや多）
19　褐色土　（ローム粒やや多、小ロームB微）
20　暗褐色土　（ローム粒やや多）
21　暗褐色土　（ローム粒やや多）
22　暗褐色土　（ローム粒やや多、ロームB微（貼床））
23　褐色土　（ローム粒やや多、小ロームBやや多）
24　黄褐色土　（ローム粒多）
25　黒褐色土　（ローム粒微）
26　褐色土　（ローム粒少）

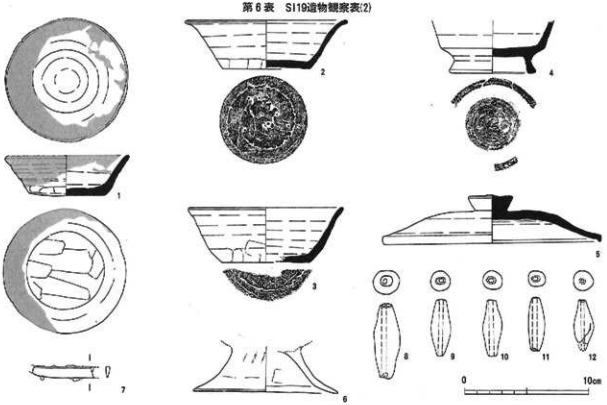
L＝A～D＝129.70m　L＝E＝129.30m

0　2m

第10図　SI19遺構平・断面図

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
7	鉄製刀子	最大幅 1.0					覆土	切先及び茎部欠損
8	土錘	長さ 6.0 最大径 2.1 孔径 0.4	・中央が膨らむ円筒形。	暗褐色		良	覆土	
9	土錘	長さ 4.5 最大径 1.6 孔径 0.3	・中央が膨らむ円筒形。	褐色		良	覆土	
10	土錘	長さ 4.5 最大径 1.5 孔径 0.3	・中央が膨らむ円筒形。	褐色		良	覆土	
11	土錘	長さ 4.2 最大径 1.3 孔径 0.35	・中央が膨らむ円筒形。	褐色		良	覆土	一部欠損
12	土錘	長さ (4.1) 最大径 1.6 孔径 0.25	・中央が膨らむ円筒形。	褐色		良	覆土	一部欠損

第6表　SI19遺物観察表(2)



第11図　SI19出土遺物実測図

2　中世

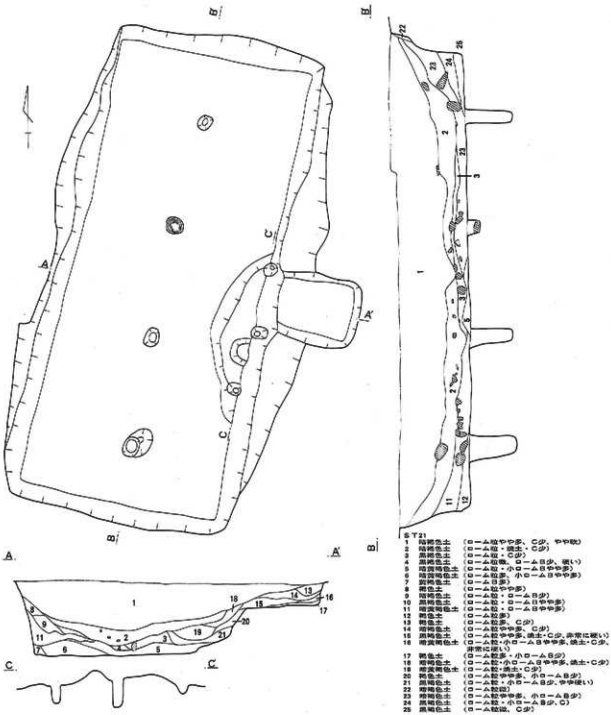
①　竪穴建物跡

トレンチ調査の結果、23基の竪穴建物跡を確認した。このうち完掘したものは、ST16, ST17, ST21, ST22, ST23の5基、一部調査がST24, ST25 の2基で残りは確認のみである。これらはT－73からG－13にかけて大形のものが集中する他は、Ⅵの曲輪内に点在する。

完掘はしなかったが、ST24, ST47はSD07, SD09とそれぞれ切り合い、ST24→SD07、ST47→SD09の前後関係が判明した。主なデータは第7表のとおりである。このうちのST21, ST22について以下記載する。

ST21（第12～14図）

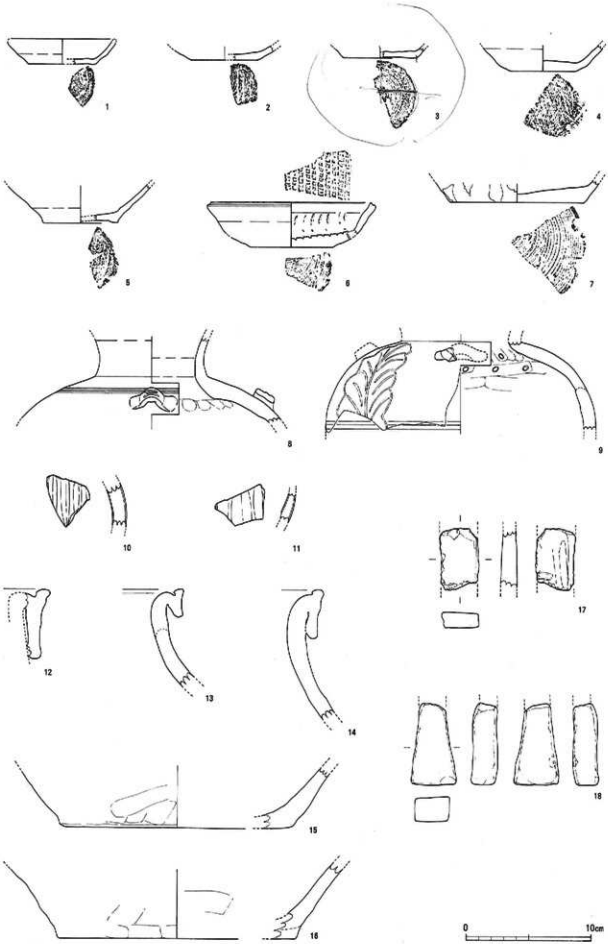
位置　G－13　**平面形**　長方形で、長辺東側の中央に入口施設を持つ。**規模**　長軸8.0m×短軸3.8m×深さ1.2m　**主軸方向**　N－9°－E　**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。　**床面**　平坦　**柱穴**　長軸上に4本、入



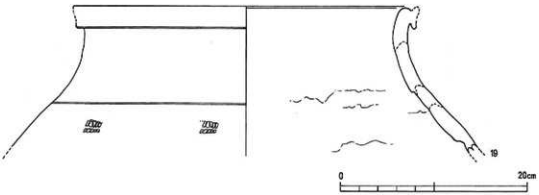
第12図　ST21道構平・断面図

道構名	規模（m） 長軸×短軸×壁高	主柱穴	出入り口施設	出土遺物 瀬戸	常滑	青磁	青銅	鉄釘	鉄札	古銭	備考
ST-16	5.35 × 2.0 × 1.0	—	――				○	○		○	
ST-17	2.0 × 1.9 × 1.3	—	――				○	○	○	○	
ST-21	8.0 × 3.8 × 1.2	4	1（東）	○	○	○		○			15C後～16C前半
ST-22	8.4 × 6.5 × 1.3	5	1（南）	○	○	○		○		○	16C前半 石多量に出土
ST-23	6.1 × 2.6 × 1.4	未	1（東）	○	○			○		○	石多量に出土
ST-24	6.8 × — × 1.0	未	――								SD07に切られる
ST-25	— × 3.65 × 1.0	未	――					○			石多量に出土

第７表　第Ⅵ次竪穴建物跡一覧表



第13図　ST21出土遺物実測図(1)



第14図　ST21出土遺物実測図(2)

口部分の階段下両脇に２本。長軸上の４本の柱間間隔は1.8m（６尺）である。また、北から２本目の柱穴には平らな川原石が据えられていた。**埋土状況**　１層は自然堆積、２層以下は人為的一括埋土。**遺物**　瀬戸，常滑，青磁，鉄釘，轡が出土。尚、轡は床直で出土。

土師器皿

大小に分かれる。小は口径８㎝前後、底径５㎝前後、器高２㎝前後である。色調は乳白色がほとんどである。大は底径５～６㎝である。底部切り離しは、何れも回転糸切り。中には板目状圧痕のみられるものもある。底部内面及び見込み部分はナデ調整。

瀬戸卸皿

６は口縁部と底部で接合はしないが、同一個体である。口縁端部に沈線が廻り、体部内面には刻み目が見られる。底部切り離しは回転糸切り。底部内面の卸目はそれほど磨耗していない。断面に二次焼成が見られる。

瀬戸壺

８，９は何れも破片であるため四耳壺か三耳壺かわからない。８は同部上半に４本の沈線が廻り、耳部は４条の小突線を等間隔に配する。９の外面には３本の沈線と草葉文が描かれている。

青磁

10,11は何れも小破片であるため器形が不明であるが酒会壺の可能性が考えられる。両者とも鎬文が見られる。

常滑甕

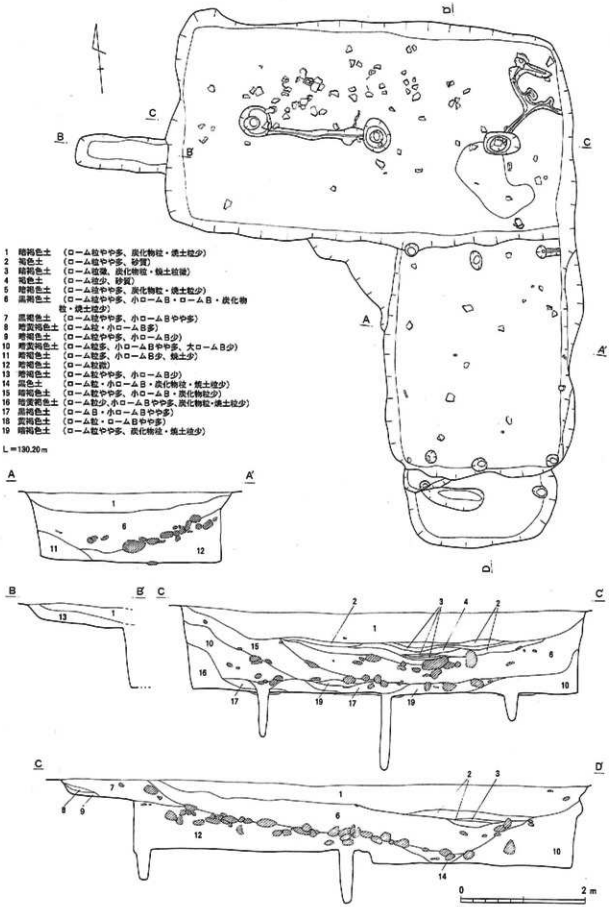
12～14は口径が35～40㎝である。口縁部形態は、13のN字状を呈するものと、12，14の縁帯が垂下し頸部に接着するものの２タイプがある。

砥石

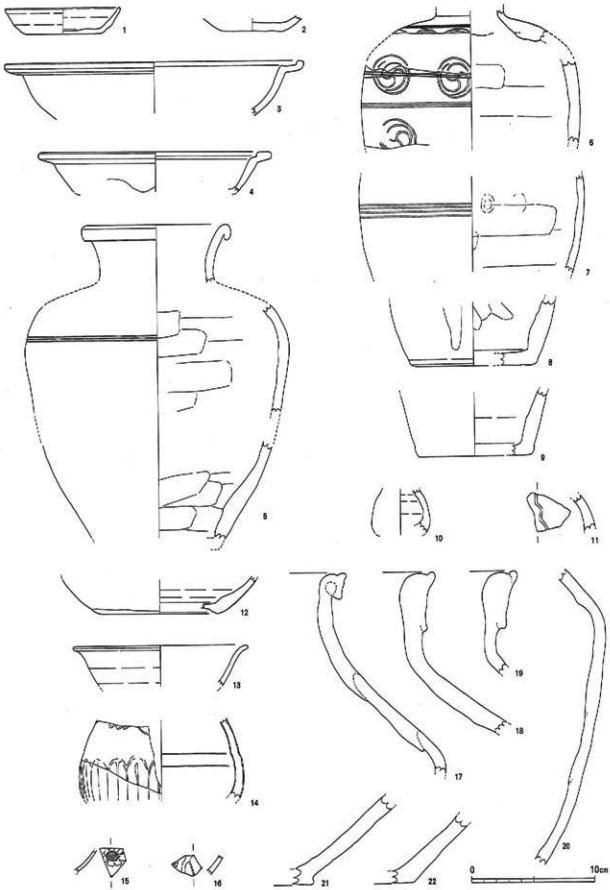
17，18は砥石で、両者とも一部欠けている。

ST22（第15～18図）

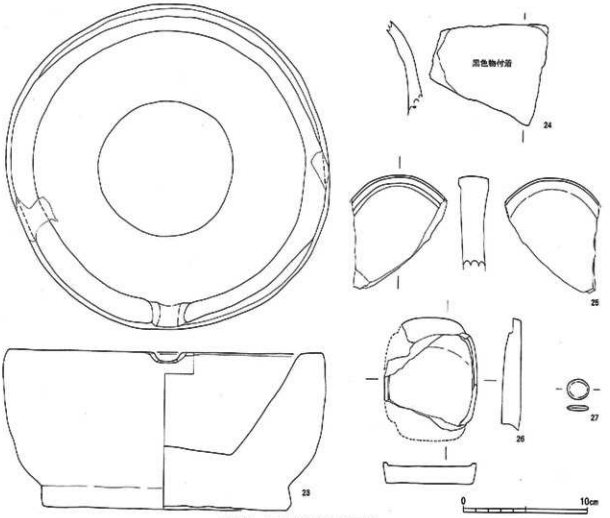
位置　G－13　**平面形**　L字形で、曲家風の建物跡である。北側にあたる東西に長い室を奥室とし、これと直交する南側にあたる南北に長い室を前室とし、さらに南側の張り出しを出入口部とすると、奥室と前室とでは、前室の方が奥室より20㎝程床が上がり、さらに出入口部は前室より80㎝ほど上がる。 **規模**　奥室　長軸6.5m×短軸3.4m×深さ1.3m　前室　長軸3.6m×短軸3.0m×深さ1.1m　出入口部　長軸2.4m×短軸1.2m×深さ0.3m　**主軸方向**　N－12°－E　**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。 **床面**　平坦　奥室の柱穴間に間仕切り溝のようなものが見られる。 **柱穴**　奥室　長軸上に３本　柱間寸法は2.0m（6.6尺）　前室　奥室側



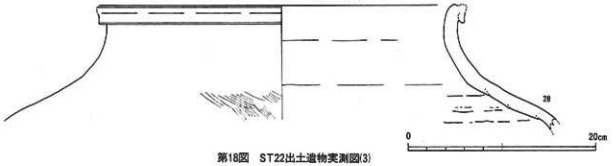
第15図 ST22遺構平・断面図



第16図　ST22出土遺物実測図(1)



第17図　ST22出土遺物実測図(2)



第18図　ST22出土遺物実測図(3)

3本、出入口部側3本の計6本　出入口部　2本　**埋土状況**　1層は自然堆積、2層以下は人為的一括埋土。6層以下に多量の川原石が両側から投げ捨てられた様な状況で出土。 **遺物**　瀬戸，常滑，青磁，鉄釘，古銭，石鉢，硯，碁石が出土。尚、ST21の遺物との接合関係がある。

土師器皿

1，2ともロクロ成形。1は口径9.2㎝、底径5.8㎝、器高2.1㎝である。色調は淡褐色。底部切り離しは回転糸切りである。底部内面及び見込み部分はナデ調整。

瀬戸折縁深皿・中皿

3，4はロクロ成形で、体部上半が残存している。その大きさから3は深皿4は中皿である。口縁部に違いが見られ、3は丸く摘み上げるのに対し、4は平らに仕上げている。

瀬戸（四耳）壺

5の3片とも接合関係はないが、その状態から同一個体と考えられる。口縁端部は玉縁状を呈する。耳部は残念ながら欠損する。胴部の形状は撫で肩で、その肩部に櫛描の平行沈線がみられる。紐輪積み成形で、器表面から頸部内面にかけて灰釉が施される。ST21に同一個体と思われる破片がある。

瀬戸瓶子

6～9は瓶子で、6が鉄釉の他は灰釉である。6には平行沈線と巴文を組み合わせて連続文様を施す。

青磁

12～14は青磁である。13は内外面無文で口唇部が外反する。14は花瓶の破片と考えられる。

青白磁

15、16は青白磁である。両者とも薄手で15は花の文様が浮彫されている。

常滑甕

口径は40～50cm前後である。口縁部形態は、17, 28のN字状を呈するものと、18, 19の縁帯が垂下し頸部に接着するものの2タイプがある。尚、24は胴部破片であるが、内面に黒色の付着物が見られる。

石製片口鉢

23は、口径25.9cm、高さ12.6cm、底径19.5cmの石製の片口鉢である。口縁部の2カ所に欠損部がある。外面には、整形時のノミ痕が見られる。

硯

25と26は石製の硯である。25は破片であるため全体像がわからないが、一辺が丸みを帯びる。また、断面左側の窪みは平らであるのに対し、右側は湾曲しており、こちらの面を使用しているものと思われる。26も破片であるが、図のように復元できる。海の部分に墨痕が残る。また、破損部の断面に炭化物が付着しており、被熱した結果と考えられる。

碁石

27は、直径1.7cmの円形で偏平な石である。

② 掘立柱建物跡

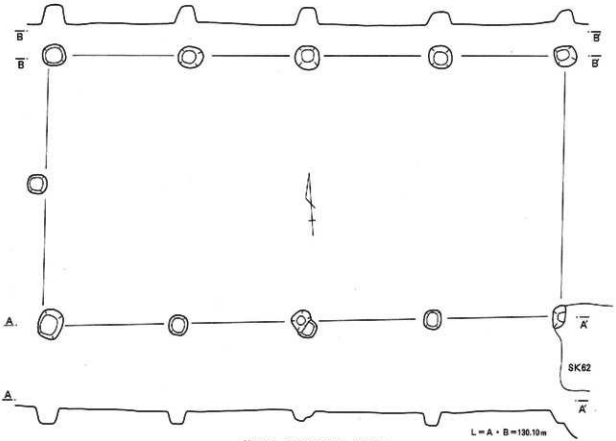
第VI次調査では、28棟の掘立柱建物跡を確認した。このうち全貌のわかるものはSB20のみである。他は2～3m幅のトレンチ調査であるため、1辺が押さえられるのみである。SB21B, SB29, SB64A, SB65などは南側に半間分の庇が付くと思われる。全体的には、VIの曲輪の中央より東側に掘立柱建物跡は集中する。

SB20（第9図）

位置 G－15北側 **規模** 桁行4間 8.2m×梁間2間 4.2m **柱間** 桁行 2.0m 梁間 2.1m **主軸方向** N－5°－E **柱穴** 隅丸方形 直径30～40cm、**深さ** 確認面から15～25cm

③ 堀（5号堀）と土橋

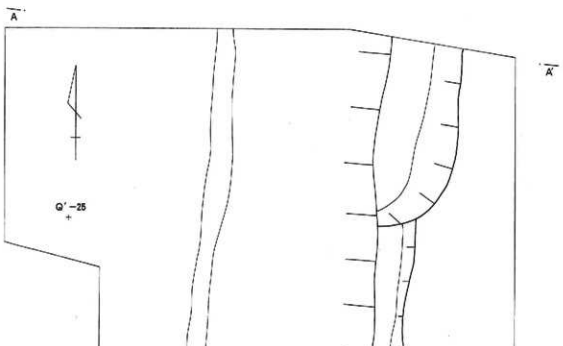
5号堀は、二重堀のうちの内側の堀である。この堀は、I～VIの曲輪を囲む。北東部の一部が栗林造成のために壊され、その際に塙・山野井両氏により調査が行われた。調査の結果、幅約17m、深さ6.5mの堀であることが判明している。今回の調査では、現在7か所の土橋状の遺構がみられるが、そのうちの南側の3か所（G-16～G-18）に絞って、それが当時のものであるかどうかの確認を中心に行った。

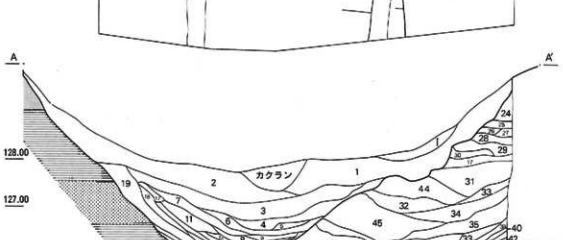


第19図　SB20遺構平・断面図

No.	トレンチ	遺構名	規模 長軸×短軸(m)	規模 長×短(間)	柱間寸法(尺)	方位	備考
1	G-15	SB-20	8.2×4.2	4×2	6.6		
2	T-70	SB-21A	−×3.6	−×2	6	N-1°-W	
3	〃	SB-21B	−×6.4	−×2半	8・9	N-5°-W	南側に庇が付く。
4	〃	SB-22	8.1×−	3×−	9	N-5°-E	
5	T-71	SB-23A	−×5.2	−×2	8・9	N-1°-W	
6	〃	SB-23B	6.0×−	3×−	6.6	N-7°-E	
7	〃	SB-28A	12.6×6.0	6×3	6.6・7	N-12°-E	
8	〃	SB-28B	6.0×−	3×−	6.6	N-4°-E	
9	T-64	SB-25	5.4×−	3×−	6	N-1°-E	
10	T-69	SB-26	−×5.0	−×2	8・9	N-2°-W	
11	T-68	SB-27	6.0×−	3×−	6.6	N-6°-E	
12	T-75	SB-32	8.4×4.2	4×2	7	N-4°-W	
13	T-76	SB-33A	6.3×−	3×−	6.6・7	N-1°-E	
14	〃	SB-33B	−×4.0	−×2	6.6	N-2°-E	
15	T-77	SB-60	−×4.8	−×2	8	N-0°-E	
16	T-78	SB-61	−×4.0	−×2	6.6	N-1°-E	
17	T-81	SB-29	−×5.6	−×2半	7	N-6°-W	南側に庇が付く。
18	T-83	SB-62	−×4.0	−×2	6.6	N-4°-W	
19	T-85	SB-24A	−×4.8	−×2	8	N-21°-E	
20	〃	SB-24B	4.2×4.2	2×2	7	N-7°-E	
21	T-89	SB-64A	−×4.7	−×2半	6.6	N-13°-E	南側に庇が付く。
22	〃	SB-64B	−×3.6	−×2	6	N-8°-E	
23	T-92	SB-30A	−×5.0	−×2	8・9	N-9°-W	
24	〃	SB-30B	−×4.0	−×2	6.6	N-1°-E	
25	T-96	SB-31A	7.2×−	4×−	6	N-16°-E	
26	〃	SB-31B	−×4.0	−×2	6.6	N-11°-E	
27	T-100	SB-65	−×6.4	−×2半	8	N-6°-E	南側に庇が付く。
28	T-101	SB-66	−×3.6	−×2	6.6・6	N-5°-E	

第8表　第VI次掘立柱建物跡一覧表





1 褐色土 （ローム粒少、KPややを）
2 褐色土 （ローム粒少）
3 暗褐色土 （ローム粒・KP少、砂質）
4 暗褐色土 （ローム粒・KPややを、砂質）
5 褐色土 （ローム粒やや多、砂質）
6 暗褐色土 （ローム粒少、KPややを、砂質）
7 黒褐色土 （ローム粒・小ロームB・KP少）
8 黒褐色土 （ローム粒少、小ロームB多、KP少）
9 黒褐色土 （ローム粒・KP微）
10 暗黄褐色土 （ローム粒・小ロームBやや多、ローム B・KP少）
11 暗褐色土 （ローム粒やや多・小ロームB少、KP ややを）
12 黒色土 （ローム粒・KP少）
13 暗黄褐色土 （ローム粒・小ロームBやや多、KP少）
14 黒褐色土 （ローム粒・小ロームB・KP少）
15 暗黄褐色土 （ローム粒やや多、小ロームBやや多、P少）
16 黒褐色土 （ローム B・KP少）
17 暗褐色土 （ローム粒少、KP微）
18 褐色土 （ローム粒・KP少）
19 暗褐色土 （ローム粒少、KPややを）
20 暗褐色土 （ローム粒多、KPややを、砂質）
21 褐色土 （ローム粒多、KP少、砂質）
22 暗黄褐色土 （ローム粒やや多・KP多、砂質）
23 黄褐色土 （ローム粒多、砂質）
24 暗褐色土 （ローム粒・小ロームB少、KPややを、 硬くしまる）
25 暗褐色土 （ローム粒・KP少、硬くしまる）
26 暗黄褐色土 （ローム粒少、KPB多）
27 暗褐色土 （ローム粒少、KPややを、KPB少）
28 暗褐色土 （ローム粒少・小ロームBやや多、KP少）
29 黄褐色土 （大ロームB多、KP少）
30 暗褐色土 （ローム粒やや多、小ロームB・KP少）
31 黒褐色土 （ローム粒・ロームBやや多、KP少）
32 黒褐色土 （ローム粒・小ロームBやや多、ロームB・KP少）
33 暗褐色土 （ローム粒・小ロームBややを）
34 黄褐色土 （ローム粒多、小ロームBやや多）
35 黒褐色土 （ローム粒・小ロームB少）
36 暗黄褐色土 （小ロームBやや多、大ロームB多）
37 黄色土 （ロームB多）
38 黒色土 （ローム粒・小ロームB少）
39 暗褐色土 （ローム粒やや多、砂質）
40 黒褐色土 （ローム粒やや多、砂質）
41 黄褐色土 （ローム粒多・KP少、砂質）
42 黒褐色土 （小ロームBやや多）
43 黄色土 （ローム粒多、KP少、砂質）
44 黄褐色土 （ローム粒やや多、ロームB多、大ローム B、大KPB）
45 黄褐色土 （ロームB多、大ロームBややを）
46 黄褐色土 （ロームB多、KPややを多、硬くしまる）
47 暗黄褐色土 （ローム粒多、やや粒、砂質）
48 黒褐色土 （ローム粒・KPやや多、砂質）
49 黒色土 （ロームB少、しまる）
50 暗褐色土 （ローム粒多、KP少、砂質）
51 暗黄褐色土 （ローム粒やや多、小ロームB多、KP ややを）
52 暗褐色土 （ローム粒・ロームB少、粘性有り）
L＝130.00m

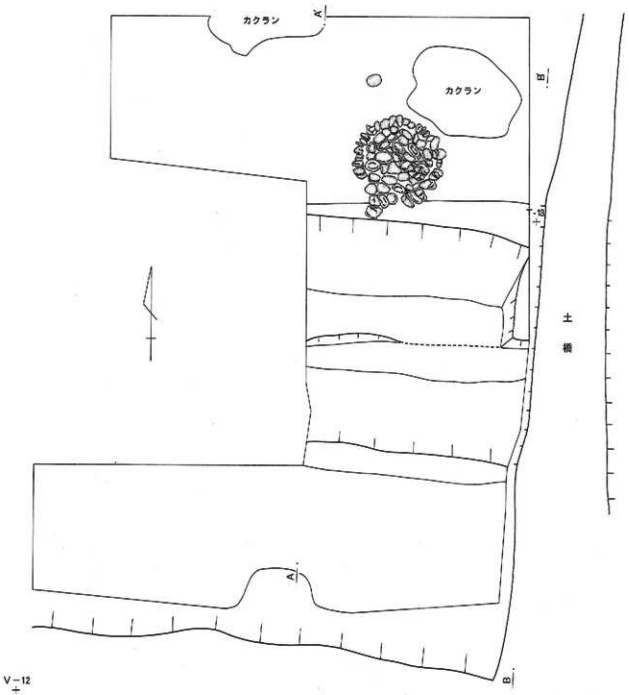
0 4m

第20図 G-16遺構平・断面図

G-16（第20図）

G-16は、5号堀の南東部の幅広い土橋状の盛り上がり部分の調査である。これに対応するように内側の土塁が幅広く途切れている。

調査の結果、G-16の北半分は堀が自然に埋まっていることがわかり、南半分は人為的に埋め戻されていることがわかった。堀の形態は薬研状を呈し、その規模は上幅約17m、下幅40cm、深さ約７ｍを測る。尚、堀

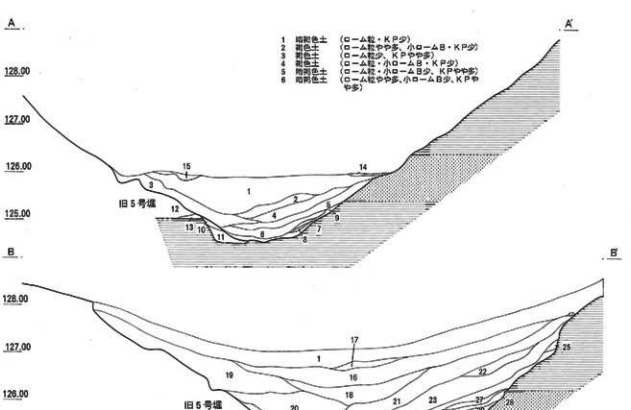


第21図　G－17遺構平面図

底の標高は125.00mであり、堀の傾斜角は47°である。

また、堀の東面ではローム地山が見られず盛土であったため、トレンチの北壁にそって1m幅の断ち割りを入れたところ5号堀の堀底よりも約60cmほど高い位置からフラットな床面が確認できた。後述するが、他のトレンチでも同様な状態が確認されたことから5号堀に先行する堀で、人為的に埋め戻されていることを確認した（第20図セクション参照）。以後これを旧5号堀とする。この堀の形態は箱堀で、その規模は下幅約5m（堀底の標高は125.60m）、堀の傾斜角は50°で、現地表面からの深さは4.4mを測る。これから推察される上幅は12～13mである。

当初の目的の土橋かどうかであるが、昨年度までの調査でも見られた、1号～4号堀のような土層観察が



第22図　G-17遺構断面図

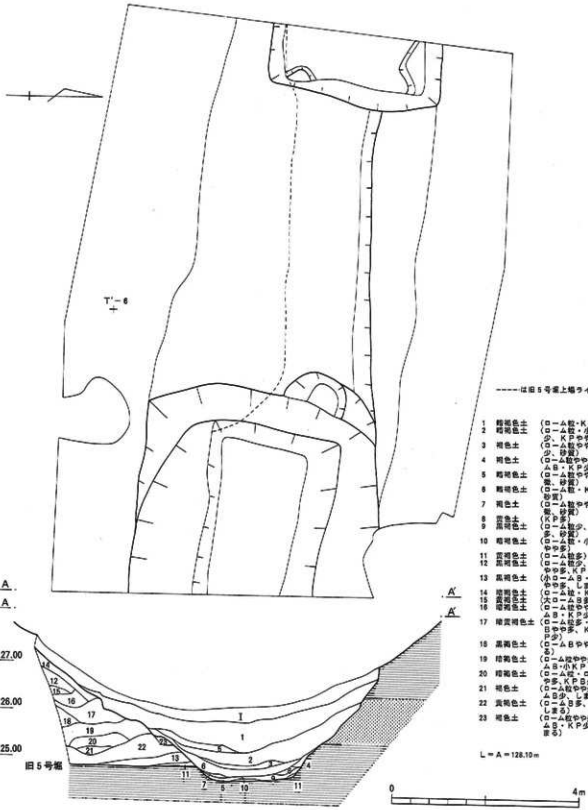
見られること、先にも述べた土塁の切れ目と対応することなどから、土橋状の盛り上がりは、土塁を崩して堀を埋めた結果と判断できる。

G-17（第21図）

G-17は、5号堀の南中央部に位置する土橋状の盛り上がり部分の調査である。これに対応するように内側の土塁が切り通し状になっている。

G-17の東壁（SPB-B′）と西壁（SPA-A′）のセクションを比べてみると、前者の3～9層が人為的な埋土であるのに対し、後者は1～9層まで自然堆積である。また、平面図では、東壁間際で北側の堀の下場が直角に曲がっている。つまり、ローム地山の掘り残し部分がある。このことから、ここが盛土による土橋と考えられる。V次調査でみられたように、4号堀における土橋が地山掘り残しによるものであるのに対し対照的であるが、これは後述するが、5号堀が数回に渡り掘の作り替えを行っていることに起因する。

G-16では1回の堀の作り替えが確認でき、G-17においても同様に旧5号堀→5号堀という変遷が窺えた。さらにこのトレンチにおいては、5号堀の掘り直しの状況が確認できた。すなわち、SPA-A′からわかるように、12, 13層を埋土にもつ旧5号堀を10, 11層を埋土にもつ薬研掘（以後5号堀Aと称す）が切り、その後、1～9層の箱堀（以後5号堀Cと称す）が切っている。これに対しSPB-B′は土橋部分であるため若干



第23図　Ｇ－18遺構平・断面図

様相を異にする。12, 13層を埋土にもつ旧５号堀を9･11･31･32層を埋土にもつ薬研堀（５号堀Ａ）が切るところまでは同じであるが、その後25, 26層を埋土にもつ箱堀（以後５号堀Ｂと称す）が切り、最終段階で16～24層により盛土され土橋となる。尚、27～29層を埋土にもつ部分も堀の可能性が指摘できる。

以上をまとめて堀の変遷を整理してみると、旧５号堀→５号堀Ａ→５号堀Ｂ→５号堀Ｃとなり、５号堀Ｃ

段階に土橋が設置された。それぞれの堀底幅及び堀底標高をみてみると、旧５号堀の堀底幅は一部分の調査のため不明、堀底標高124.94～125.00ｍ、５号堀Ａの堀底幅は65～70㎝、堀底標高124.50～124.54ｍ、５号堀Ｂの堀底幅は2.4ｍ、堀底標高125.00ｍ、５号堀Ｃの堀底幅は1.4ｍ、堀底標高124.56ｍである。唯一上幅のわかる５号堀Ｃ上幅は約16ｍである。

G-18（第23図）

G-18は、５号堀の南西隅に位置する土橋状の盛り上がり部分の調査である。G-17ほどではないが若干土塁が窪み切り通し状になっている。また調査前の現状では、土橋状の盛り上がり部分は２段になっていた。

調査の結果もこれに対応するように、トレンチ東側1/3 までは５号堀が続くが、急に地山の掘り残しにより立ち上がり掘が途切れる。地山掘り残し部分のフラットな面は８ｍほど続く。４号堀でみられた土橋状の地山掘り残しとの違いは、この幅の広さと、地山をすべて残すのではなく標高126.40ｍの鹿沼層直上まで掘り込んでいる点である。言い換えれば、この部分だけ鹿沼の上のローム層（田原ローム）をカットしているのである。そして、トレンチ西壁から約２ｍほどのところから、約25㎝の浅い掘り込みがみられる。この掘り込みはある時期まで自然に埋まっているが、その後人為的に約1.5ｍ程の盛土がされる。この状況が、発掘調査前の２段に見えた原因である。

また、このトレンチでも他と同様旧５号堀と５号堀の切り合い関係が確認できた。さらにここでは、地山の掘り残し部分があったお蔭で、旧５号堀の内側のラインが確認できた。旧５号堀の堀底標高は124.90ｍ、５号堀の堀底幅は1.8ｍ、堀底標高124.60ｍ、上幅約15ｍである。尚、５号堀の断面をみると若干であるが、南側半分が窪んでいる様子が窺えることから、この部分が薬研堀の５号堀Ａの痕跡であると考えられる。

④溝

SD02, SD07～SD10の５条が確認できた。現状で明瞭に確認できていたのはSD07のみで、その他は若干窪んでいる様子が観察できた程度であった。実際の調査結果もロームを若干掘り込む程度の浅いものである。

SD02は第Ⅴ次調査でも確認できたその繋がりで、４号堀から30ｍ南に行ったところで一端折れ曲がり、そこから60ｍのところでまた折れ曲がり東に40ｍほど延びる。ここで、丁度近現代のものと思われる炭窯が作られているため、溝の状況が不明瞭であるが、この前後で途切れると考えられる。

SD10は、このSD02と対応するものと考えられる。T-95では溝が確認出来ず、T-94で見られることから、この間で再び溝が現れるものと考えられる。T-95の南側に若干地形が曲がるところが観察できることから、その地点まで延びていることが予想される。そして、SD02が途切れたと考えられる地点から南に60ｍのところで西に折れ曲がり、40ｍのところで南に折れ曲がり、10ｍほどでまた西に折れ曲がる。今回の調査で、T-99までは延びることを確認した。溝の規模は上幅約１ｍ、下幅10～20㎝、深さは約40㎝で、断面Ｕ字形を呈する。また、基準層位Ⅱ層から掘り込まれている。

SD07は、やや歪な長方形に廻る。掘り方は、まず緩い傾斜に掘り、底面をさらに逆台形状に掘り込む。このため上幅は広く２～４ｍ、部分的には５ｍ程のところもある。下幅20～30㎝、深さは浅い所で60㎝、深い所で95㎝を測る。

SD08は、地表面での観察では一周するように見えたが、T-50, T-62, T-63で確認されたのみである。

SD09は、T-73, T-74 で確認できたがG-13では確認できず、30ｍ程の長さで終わってしまうものと想定できる。

Ⅲ　おわりに

1　中世について

今回の調査の成果として次の３点が挙げられる。

①　５号堀は、本城を囲む二重堀のうちの内側の堀である。この堀は数回に渡り作り替えや掘り直しが行われている。それを端的に示す資料がＧ－17である。ここでの結果及び他のトレンチから、少なくとも３回の作り替え、掘り直しが行われたことがわかった。旧５号堀→５号堀Ａ→５号堀Ｂ→５号堀Ｃという変遷である。（第24図参照）　そして、５号堀Ｃの段階でＧ－17に土橋が設置される。

旧５号堀は、Ｇ－16～Ｇ－18及び昭和51年度に行われた調査から同様な所見が得られ、５号堀Ｃ（現在我々が目にする堀）よりも一回り大きく外側に掘られていた堀であることがわかった。堀の規模は、推定で上幅10～13m、深さが復元値で４～５ｍ、下幅４～５ｍ、傾斜角は50～55°の箱堀である。

そして、この堀をすべて人為的に埋め戻した後５号堀Ａは掘られる。その形態が薬研堀であることから、Ｇ－16の薬研堀と対応すると考えられるが、その後Ｇ－17の調査結果からは、５号堀Ｂ→５号堀Ｃと掘り直されていることがわかっており、５号堀の南側と東側とでの在り方の違いがみられる。いずれにしても５号堀Ｃ段階に土橋が設置されたことは間違いなく、また、５号堀Ｂの自然堆積層（26層）も10～20cmとそれほど堆積せずに土橋用の盛土がなされていることから、短期間のうちに掘り直されたものと考えられる。よって、最終段階には、５号堀Ａのような薬研堀の部分と５号堀Ｃのような箱堀の部分が併存していたと想定できる。

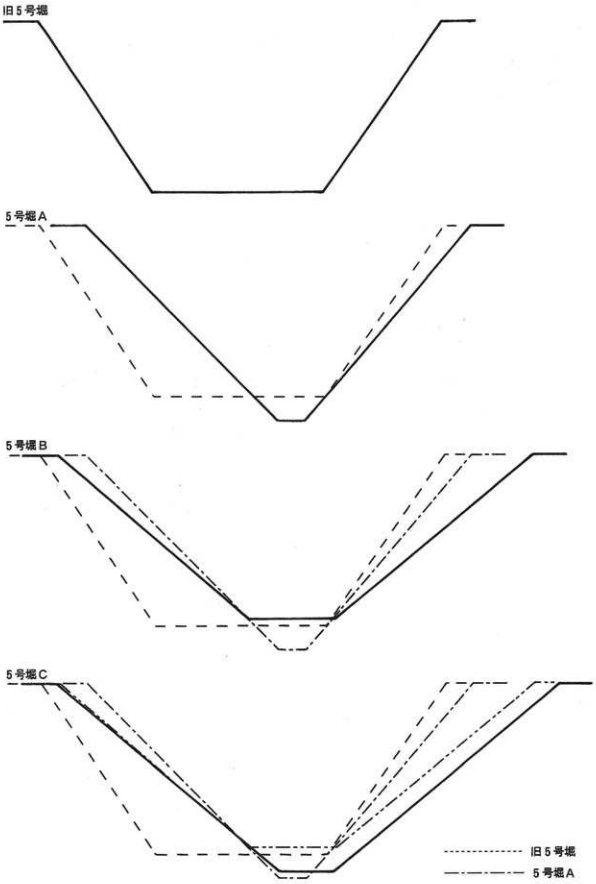
尚、Ｇ－17とＧ－18の２か所で盛土による土橋を確認したが、旧５号堀～５号堀Ｂ段階の入口施設に関しては不明と言わざるを得ない。ただ、この問題を解決しようとするならば、全面発掘をする以外に方法はない。

最後に、５号堀について１点だけ付け加えておくと、前回までの調査で１～４号堀のすべてが人為的に土塁を崩し堀を埋めている点のに対し、５号堀（ここでは最終のＣ段を指す）は南東隅の一部を除いて自然堆積である。この差がどんな要因に起因するのかは今後の検討課題である。

②　竪穴建物跡は今回の調査で23基確認できた。その多くは人為的に埋め戻されているが、ST21，ST22のように途中まで埋め戻しした後、自然に埋まったものもある。また、ST22，ST23 は数百に及ぶ川原石を埋め戻し途中に投げ捨てているが、これが何のためのものなのかは今後の検討課題である。

前回までの調査で14世紀中葉頃、15世紀前半頃の竪穴建物跡を確認したが、今回赤羽・中野分類10型式（中野1995）の常滑焼甕がST22から出土しており、15世紀後半～16世紀前半にかけての建物跡と考えられる。尚、ST22とST21の土器間に接合関係が見られ、建物の軸方向もほぼ同じであることから、同時期の所産と考えられる。

③　掘立柱建物跡は今回の調査で28棟確認できた。この他にも柱穴と思われるものが多数確認できたことから、その数はもっと増えると考えられる。そして、その多くはⅥの曲輪の中軸線又東側に集中するようである。第８表の一覧を見ると、柱間寸法が(1)８尺以上使用するもの、(2)７尺を使用するもの、(3)6.6尺以下のものに分けられる。(1)と(2)はN-6°-E～N-6°-Wの間に集中し、(3)はN-1°-E～N-13°-Eとすべて東側に振れている。SB21やSB23のようにほぼ同じ場所に位置するものも確認できていることから、少なくと



第24図　５号堀変遷図

も2時期の変遷が想定できる。

以上のことから、堀も建物もいくつかの変遷があることがわかってきた。歴史的には14世紀の中頃と16世紀の中頃に文献上で飛山城の存在を確認できるが、この他の時期においても飛山城は使用されていたものと考えられる。今後は、出土遺物の検討をさらに進めることにより、史実と考古資料を結び付けていきたい。

2　古代について

今回の調査で、古代の竪穴住居跡が8軒確認され、その内のSI18から「烽家」と書かれた墨書土器が出土した。「烽」は「ホウ」「トブヒ」と読まれ、「のろし」を意味する。そして、ここでの「家」は、「郡家」や「駅家」のように公的施設を意味するものと考えられる。すなわち、狼煙を挙げる公的施設のことを指し示す。「烽」の設置は『日本書紀』天智天皇三年是歳条に既に見られるが、全国的規模での設置は、律令体制下になってからである。『令義解』巻五　軍防令には、烽を40里毎に設置することが規定されている。そして、その目的は外的進入などを緊急に連絡するためのものである。そのため、大陸から遠く離れた東日本においては、その存在すら疑問視されていた。今回のこの土器の発見の意義のひとつは、この点を否定したことにある。この土器は新治産で、本跡と近い位置で作られた土器であることから、この周辺で使われ、捨てられたものであることは間違いないが、果たして本跡がその場所であるかどうかが問題となる。

その点に関しては次の3点から、本跡が「烽家」があった場所と想定した。

①　地形的に見て、鬼怒川に迫り出した台地上であることから、こちらからの見晴らしが良いばかりでなく周辺からも目安となる場所である。尚、8軒の竪穴住居跡群は、すべてこの見晴らしの良い西崖寄りに占地している。また、本跡から西方約2.5kmの場所を古代東山道が通っていたと考えられる。

②　「烽家」墨書土器を出したSI18は、その構造が竪穴でありながら掘立柱建物風と特殊で、住居跡群のほぼ中央に位置する。

③　この城の名前「飛山」は「烽(とぶひ)」からきている可能性が高い。

以上の点から、本跡が「烽家」があった可能性が高いと考えられる。

尚、白河関の近くにも「飛山」という地名があり、「烽」のあった場所と言い伝えられているとのことである(梅宮1971)。

(参考文献)

市村高男 1988 「文献史料から見た飛山城の歴史と性格」『史跡飛山城保存整備基本計画』宇都宮市教育委員会

梅宮　茂 1971 「関跡」『新版考古学講座』第9巻特論　雄山閣

宇都宮市教育委員会 1996 『シンポジウム古代国家とのろし』

中野晴久 1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館

藤澤良祐 1995 「9中世陶器　[1] 古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編

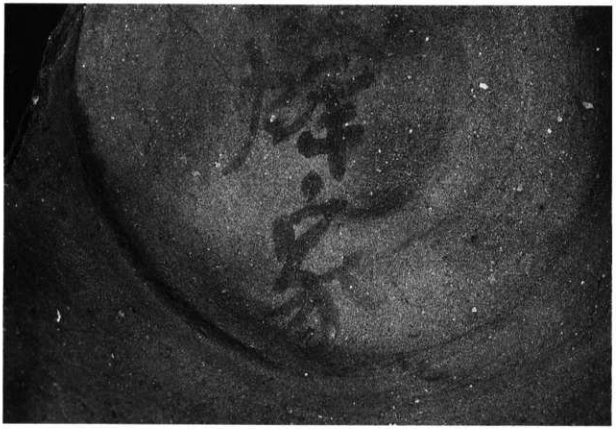
写 真 図 版

① 飛山城跡全景（上から）

② 飛山城跡遠景（北から）

③ ＳＩ18完掘状況

④ ＳＩ04遺物出土状況



⑤ 「烽家」の墨書土器

⑥ Ｔ－78遺構確認状況

⑦ ＳＸ10作業風景

⑧ ST21（北から）

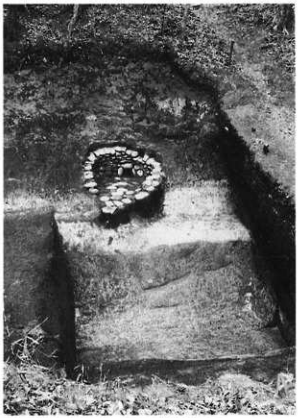
⑨ ST21（北東から）

⑩ ST22（北東から）

⑪ SB20（東から）

⑫ ST23（南西から）

⑬ ST23床下土坑



⑭ G－17（南から）

⑲ G－16（上から）

⑲ G－18（西から）

報告書抄録

ふりがな	とびやまじょうせきだいろくじかくにんちょうさがいほう
書名	飛山城跡第Ⅵ次確認調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第41集
編著者名	今平利幸
編集機関	栃木県宇都宮市教育委員会
所在地	〒320　栃木県宇都宮市旭1－1－5　℡028－632－2764
発行年月日	西暦1997年（平成9年）3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				㎡	
飛山城跡（とびやまじょうせき）	栃木県（とちぎけん） 宇都宮市（うつのみやし） 竹下町（たけしたまち） 329－1 他		304	36度 33度 09秒	139度 58分 09秒	19950904 ～ 19960318	4,500	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飛山城跡	烽跡	平安時代	住居跡　8	土器 鉄製品 土錘	「烽家」墨書土器出土
	城館跡	中世	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 堀		

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第41集

飛山城跡第Ⅵ次確認調査概報

平成９年３月発行

発　行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭1－1－5）
TEL　（028）632－2764

印　刷　下野印刷株式会社
（宇都宮市宝木町1－28）
TEL　（028）622－6953